

## 「世界の禪者」 鈴木大拙のつぶやき

—— 鷗外、漱石、大拙 ——

葛 谷 登

「世界の禪者」とは秋月龍珉が鈴木大拙を評した言葉で、これは大拙の生涯を述べた同氏の書物のタイトルにもなっている（岩波同時代ライブラリー一二九）。鈴木大拙（一八七〇～一九六六）は近代日本で最初に英語で東洋の仏教思想、特に禪を西洋に語り伝えた人物である。仏教思想を理解するだけでも骨の折れる仕事であるのに、更にその上、理解したものを外国語で表現するのであるから、至難の技と言うほかはない。同時通訳の名手國弘正雄によれば、「現に英語を母国語としない人で、英米人も感心するほどの高度の内容を、みごとに表現してみせた人」（『英語の話し方』サイマル出版、一九七〇年、五六頁）の一人に入る。

こう見て来ると、我々庶民からすれば、雲の上の人のように思えるが、大拙が結ぶ人の縁はなかなか俗であって面白い。敗戦二年めの一九四七年（昭和二二年）に沈滞ムードを吹き飛ば

すかのように、「東京ブギウギ」という歌が流行った。歌い手は笠置シズ子、作詞は鈴木勝、作曲は服部良一である。この作詞家の鈴木勝こそ大拙の養子（英国人で、名はアラン）なのである。勝ことアランの母語は英語である。アランは生みの言葉ならぬ育ての言葉の日本語で戦後敗北感に打ちひしがれた日本人の魂を揺さぶり勇気づけたのであった。大拙とは対照的な位置にある。このアランの妻がその前の年に大ヒットを飛ばした「愛のスウィング」の歌い手、池真理子であって、彼女はアランと離婚した後も、大拙を岳父と仰いで敬い親しんだようである。

この大拙の増補新版の全集四十巻（岩波書店）が二〇〇三年十二月に完結した。今回の全集の特長の一つは、「英語の大拙書簡は、今回ケールス宛百通弱、ビアトリス宛二百通というように大量採録した」（桐田清秀『全集』の完結にあたって）月

報40、一一頁)とところにある。大拙に英文著作が多いのは固よりであるが、これほど英文書簡を日常的に綴った人間は近代日本において稀有な存在ではないか。著作であれば、理性を土台に論理を構築しなければならない。ところが、書簡となれば、非公開であつて、感情の表出が許され、赤裸々な人間の姿を曝け出すことになる。客観的に理屈を立て思想を非母語で表現することは意外に難しくはないのかも知れないが、主観的な感情を非母語で表わそうとすれば腹ふくる思いが昂じるだけではないだろうか。その不可能とも思えることを大拙はやつてのけたのである。感情表現辞典で調べて来たのつべりとした表現などはおよそその時との自分の感情の機微など映し出せるものではない。

ところで大拙の書簡の中味に入る前に、彼とほぼ同時代を生きて、西洋での生活経験を有し、西洋文明にかぶれることなく、且つ西洋を貶めることなく、東洋思想を心の拠り所としたように思われる人物に森鷗外(一八六二〜一九二二)、夏目漱石(一八六七〜一九一六)がいる。鷗外、漱石、大拙の三人は明治期に欧米に渡りそこでしばらく生活した人物たちである。海外に出るにあつた縁起が三人三様でこれまた頗る面白いので道草をして一寸紹介してみよう。

鷗外は一八八四年(明治十七年)、二十三歳の時、陸軍衛生制度調査および軍隊衛生学研究のためドイツに官費留学を命ぜられた(中央公論『日本の名著42 夏目漱石 森鷗外』の「年

譜」による)。鷗外はその三年前の一八八一年(明治十四年)の七月に十九歳で東京大学医学部を卒業している。卒業生二十八名中八番の成績だった。最年長の卒業生は三十二歳で鷗外より一回り年上であつた。卒業生の平均年齢は二十五、六というところであろう。一八七四年(明治七年)に学齢不足のため年齢を二歳ごまかして十二歳で東大医学部に入学したのであるから、これはまさに神童の名に値しよう。鷗外は卒業の年の十二月に陸軍省に出仕している。軍医への道を歩み始めたのである。七月から十二月までに何があつたのか。

明治十四年十一月二十日付けで鷗外は東大の親友賀古鶴所に手紙を出している。

……今朝三宅秀氏を訪い相談に及び候ところ、同氏の言に、洋行の事も未だ決起せず。且つ三人以上には成るまじく、その内一人は去年卒業の者かも知れず。撰法は試験成績を主とす。所詮脚の番になるべからず。断念して然るべしということなれば、是非なく思ひ止り申し候。然れば矢張双親共の意に遵い、陸軍省に出仕の外はなにごと候。

『新潮日本文学アルバム 森鷗外』ではこの手紙の写真を掲載している(一九頁)。『岩波鷗外全集』第三十六卷(書簡篇)の最初に登場する書簡である。但し岩波では「三宅秀氏」を「三宅秀氏」と記している。これは岩波の誤記であろう。三宅秀(一八四八〜一九三八)は日本医学史上特筆すべき人物である。幼少の時から高島秋帆等の家塾に学び、一八六三年(文久三年)

の時、遣欧使節に随行してフランスに赴き、帰国後は横浜のヘボンについて英学を修め、また半国軍医ウォットルのもとで三年医学を修めた。明治政府のもとでは早々に明治三年東大医学部に出任した。明治十八年私費で渡欧して医学の研鑽を深め、帰国後、明治二十一年日本で初めての医学博士の学位を受けた。彼は近代日本の医学教育制度の基礎を固めた功労者である。語学にも堪能で早くから西洋医学を積極的に摂取しようとしていた点で、まさに鷗外の先輩格に当たる人物である。それだけに三宅からすれば鷗外は自分の地盤を脅かす恐ろしい後輩でもあったのだろう。

鷗外は自分の師でもあり東大医学部教授陣のトップクラスに位置していたこの三宅を相手に卒業早々、内々に官費海外留学のための運動をしたわけなのだ。それに対して三宅は、「海外留学は卒業時の成績上位三人以内に入っていないければ無理だ。八番のお前にその可能性はないからあきらめろ。」とつれない印当を渡したのである。陸軍省に入ったのは、親の希望を容れずとは言うが、実は官費海外留学の可能性を求めてのことであつたらう。

陸軍省に出仕して三年後の一八八四年（明治十七年）、二十歳の時、鷗外はめでたくドイツに留学した。こうして彼は明治二十一年、二十六歳の時までドイツに滞在した。ヴィルヘルム一世とビスマルクがコンビを組んでドイツが破竹の勢いで躍進していた時期に相当する。彼が類稀な語学力を駆使してドイ

ツでいかに華々しい活躍をしたかということは、彼の「独逸日記」を見てもよく分かる。時あたかも「普請中」の日本の国威発揚のために異国の地で異国の言葉で堂々の論陣を張ったのである。美事というほかはない。まさに我が世の春を謳歌していたのである。

それでは漱石はどうか。彼は一九〇〇年（明治三十三年）、三十四歳のとき、第五高等学校在職中、英語研究のため満二年の英国留学を文部省より命ぜられた。作家の真継伸彦は、「三十四歳の漱石は命を固辞しきれず、不承不承イギリスへ赴いた。」（『日本の名著14』十四頁）と記している。果たしてそうであろうか。

漱石の『文学論』の「序」には英語留学に関して彼の思いが語られている。

余が英国に留学を命ぜられたるは明治三十三年にて余が第五高等学校教授たるの時なり。当時余は特に洋行の希望を抱かず、且つ他に余よりも適當なる人あるべきを信じたれば、一応其旨を時の校長及び教頭に申し出でたり。

（岩波『漱石全集』第五卷、五頁）

漱石は由緒止しき江戸っ子である。今の早稲田大学の近くにあり坂が「夏目坂」と命名されるほどの素封家の家柄である。受験教育に嫌気がさして名門府立一中を中退して漢文を学ぶためということからか二松学舎に転校したへそ曲りである。お江戸三百年の町人文化と中国四千年の文人文化にとっぴり漬かった

漱石にとって口が裂けても「西洋文化はすごいもんだ。おいらは西洋に行つてみたい」というようなことなぞ言えなかつたのである。石見というお江戸から見れば僻遠の地から出て来たただ頭が良いだけ取り柄の村夫子の鷗外とは訳が違ふ。「特に洋行の希望を抱かず」の「特に」が曲者なのである。裏返して言えば人並みに洋行の希望を抱いていたというところが本音なのではないだろうか。留学のための運動工作など腐つても出来なかつたのである。

漱石は『文学論』の「序」の中で、「余が政府より受る学費は年に千八百円に過ぎざれば……」（前掲書、六頁）と文部省の支給する学費の少なさを嘆いているが、そもそも派遣した側の文部省は箔を着けさせるために「留学」という名目で海外に送り出したのであって、留学先でしつかり勉強してくれねば困るといふようなケチな気持ちは少しもなかつたのである。或いは勉強されては困るといふのが本音だったのかも知れない。漱石は英国で箔をつけるためではなく実力をつけるためにそれこそ死に物狂いで真剣に英文学を勉強したのである。それこそ箔をつけるためにだけやって来ている日本の連中からすれば「ある日本人は書を本国に致して余を狂気なりと云へる由。賢明なる人々の言ふ所には偽りなかるべし。たゞ不敏にして、是等の人々に対して感謝の意を表する能はざるを遺憾とするのみ。」（前掲書、一六頁）とあるように、漱石は気が狂つたことにならぬのだが、漱石からすれば「己をそう評するお前らは懶惰の極

みではないか。」ということになるのであろう。限られた学費の範囲で「根本的に文学とは如何なるものぞ」という問いを解こうとすれば「余は下宿に立て籠りたり」という以外になつたのであろう。

おまけに漱石が留学した時期は鷗外の留学した時期より世の中の空気が重くなつていた。漱石の留学期間の一九〇二年には英国のホブソン（一八五八〜一九四〇）が、『帝国主義論』を著わして一九世紀後半の列強の海外植民地獲得競争を批判している。鷗外の留学期は日本は「普請中」だったのだが、「西洋文明のすべての有効的な実地的技術を身につけた東洋国民としての日本の最近の出現が、近き将来においてアジアの歴史の進路を深刻に変更する気配があることは、否定出来ない。」（岩波文庫、矢内原忠雄訳『帝国主義論』下巻、二四六頁）とあるように、西を向いても東を向いても世界全体が帝国主義化していったのである。正常で上等な神経の持ち主ならば、狂わずんば己まずであつたのかも知れない。まして漱石は三十の半ばである。結婚して一家を構えて四、五年の働き盛り、分別盛りを迎えようとする頃である。「骨格の出来上りたる大人が急に角兵衛獅子の巧妙なる技術を学ばん」といふようなことは、英国文学の故郷へ来たからとて出来るものではない。懊悩は深まるのみであつた。

鷗外、漱石の留学事情を述べたあとに、大拙について見てみたい。大拙は一八九七年（明治三十年）、二十八歳の時に渡来

し、一九〇九年（明治四十二年）、四十歳の時に帰国している。青年期の後期から壮年期に差し掛かるまでをざっと十二年間、米国で暮らしたわけである。大拙はそもそも米国行きの意思は最初なかった。明治二十八年五月二十六日付けの山本良吉宛ての手紙の中で、「印度に行きて梵語研究をやらんとすの覚悟に候、学資はどうかなるべしとの見込なり」（岩波『増補新版 鈴木大拙全集』第三十六巻、五六頁）と述べているように、彼の宿志は仏教の故郷のインドへの留学であった。それが同年十二月五日付けの山本への手紙の中で、「老師は俄に思ひかへしたるが如く米国行をす、められ候、私も印度よりは其方面白分るべしと思ふ、米国ならばケール博士も居る事なり、又パーリヤサンス（ク）リットを研究するにも都合よかるべし」（前掲書、六四頁）とあるように、降って湧いたように、突然米国行きの話が持ち上がったのである。

大拙は石川の金沢の医者の子に生まれた。臨済宗が宗旨であった。明治八年に、七歳の時、父を失くした。明治二十四年には、二十二歳で母を失くしている。明治四年には廃藩置県が断行され、土族は生活の糧を失ったわけだから、そのような中で一家の柱を失った大拙家の暮し向きは一気に傾いたのである。四男（元、亨、利、貞）一女の末子であったのだが、学齢期の初っぱなに父親を失くしたことは痛かった。旧制四高に入ったが、家計の都合から中退、高等小学校（今の中学校）の英語の教師となって生計を立てた。明治二十四年、二十二歳の時、学

問への思いを断ち切り難く、上京して東京専門学校（今の早稲田大学）に学ぶも半年足らずで中退、翌二十五年、東大哲学科の選科に入学したが、明治二十八年、二十五歳の時にそこも中退した。中退の理由については、秋月が「円覚寺での参禪に熱中されるようになったためかと思われる。」（『世界の禪者』四一頁）と推測するが、一番の理由は経済的なものであったろう。

大拙の禪の師釈宗演は三十四歳で、今北洪川（大拙の師でもある）の入寂後、円覚寺管長となった。彼は明治二十六年にシカゴで開催された万国宗教会議に出席した。このときの講演原稿を英訳したのが、誰であろう大拙であった。和訳ではない。釈宗演はこの大会でドイツ系米国人ポール・ケール（一八五二〜一九一九）と知り合った。ケールは一元論的実証主義者で東洋思想に造詣が深く、オーブンコート社の編集者として雑誌の出版にも従事していた。彼は、『The Gospel of Buddha』の著者でもあり、釈宗演に同書を送ったところ、大拙がその邦訳を担当するところとなった（『世界の禪者』一一八〜九頁）。「金はないが、勉強はしたし。さて、どうするか。」と思いついていた結果、釈宗演の取り結ぶ不思議な機縁から米国に渡るようになったのである。但し、これは留学ではない。東西両洋の言葉を操ることの出来る大拙の異才が買われて、ポール・ケールの助手のような形で働くために行ったようなものである。いずここのいずれの時代の出版社もベストセラーとなるような本を出さない限り、台所は火の車である。米国へ渡ってもまた貧乏

な生活を強いられたのである。文部省からの学費が少ないなどという寝ぼけたことは曲りなりにも言うことが出来なかった。漱石は金がなかったが、時間はあった。大拙の場合、出版社に勤務している以上、時間もなかったのである。

では、大拙の書簡に戻ろう。大拙は英文と日文を通じ大量の手紙を書いた。これらは書簡文学としても価値のあるものである。その内、渡米前、渡米後、帰国後してから就職するまでこの時代のものがもつとも面白い。身のふり方が定まらず、悶々とした日々を送っている人間がどういふ声を発するのか、この時期の大拙の書簡を見ると、その生々しい声が痛いほど伝わってくる。

日本語の書簡も国より見るべき価値はある。例えば、明治三十一年三月三十日付けの西田幾多郎宛書簡では、

思想の自由と云へば、国民の大多数が万世一系の帝統を無上の榮譽となし、教育勅語又は、維新の勅語などかを何かと云ふと口にして、人の思想感情を束縛せんとするは迷妄の極なり、万世一系は日本の隠遁的国民なるを証し、勅語を楯とするは思想に独立不羈の力なきを証するもの、予は文部大臣が嘗て比の如きつまらぬ勅語を出して国民が自由の思想と感情とを桎梏したるを大に慨するものなり、」(岩波『増補新版 鈴木大拙全集』第三十六卷、一三六頁)

と述べて、思想の自由の観点から、日本の国家神造の欺瞞を痛烈に批判している。

また、明治三十七年十二月二十一日付けの西田幾多郎宛て書簡では、

日々の新聞旅順方面を惨を報ず、読むものをして覚えず寒毛卓豎せしむ、……国威とか云ふもの、戦あるごとに揚がるは去ることなるが、……一旦出で行くもの生還を期し難かるべし、多くの有為の青年を斃すこと如何にも残念なす。(前掲書、二五八頁)

と述べ、日露戦争には一步退いた消極的、懐疑的な態度を示している。更に、明治三十八年二月十二日付けの山本良吉宛書簡では、「文明のために露国と戦ふなどは虚言八百なり、何れも自国の利益のためなり、」(二六九頁)と、帝国主義戦争の本質を突いたいかにも当時の日本人としては大胆な批判を投げかけている。

まだまだ日文書簡には刮目に値する文章が多々見られ、枚挙に遑無いほどであるが、非母語の英語での真情の吐露を試みた英文書簡は外国人による一種の英文学の作品としても価値あるものではないだろうか。彼の英文書簡を読む限り、書いている本人の大拙に隔靴搔痒の意識は認められないのである。心と言葉とが表裏一体となっているように思えてならない。

残念ながら紙幅の関係から、特に二通のみを拙訳して紹介するにとどめよう。一通めは、明治四十年五月二十一日付け、西田幾多郎宛て書簡である。

この国に住み続けてはいるが、僕の将来に明かりは見えない

い。このまま十年居続けたとて僕の置かれた状況に変化が見られないであろうことは確実である。僕はもう老いてしまった。日本に帰って外交関係の仕事に就きたいのだが、それには年を取り過ぎた。しかし生きて行くためには何かをせねばならぬのだ。(前掲書、三〇五頁)

二十八歳の時に米国での生活に希望を抱いてやって来たものの、田舎町の出版社の社員として天涯孤獨の身寄りのないまま十年一日のわびしい生活が続けて来た。体をこわしては入院し、一入心細さを感じたこともあった。この先一体どうなるのか。五里霧中である。気がつけば不惑の年にさしかかったのだが、惑いは増すばかりであった。

大拙は帰国の念願が叶い、明治四十二年、三十九歳で帰国した。だが帰国したものの、生活は甚だ安定を欠いた。明治四十四年二月二十三日付け、ポール・ケラス宛て書簡を見てみよう。

私は現在、東京帝国大学講師として雇われています。しかし給料はとつても少ないのです。あなたのところにもつとればよかったです。この前、あなたからお手紙を頂戴したとき、あなたのもとに帰るべきでした。……日本人は心がとても狭い。日本政府は忠君愛国思想の古き教えに抵触するような新しい思想は何でもすべて押えつけようとしています。日露戦争以後、反動的な人間たちが権力を揮って軍国主義の嵐が荒れ狂っています。(前掲書、三四三、四頁)

この当時のことについて、(明治四十二年)十月には、母校東京帝国大学講師をも兼ねた。これは齋藤秀三郎教授の点があまりからくて、みな落第するので、そのあとをやれとかいうことで、専任の千葉氏の海外留守のあいだの補講をされたわけである。『世界の禪者』(二〇一頁)と秋月は面白いエピソードを紹介している。東大での漱石の英文学の前任者がラフカディオ・ハーンという傑物であったように、大拙の英語の前任者も英語の巨人齋藤秀三郎であったのだ。

職についても大拙は給料が少ないとつぶやいた。「年譜」によれば、東大は「手当一箇年金四百円ヲ支給ス」(全集第四十卷、一二三頁)と大拙に年額四百円を支給した。漱石は年額千八百円を少なすぎると不平を言った。大拙のほうが大人なのかも知れない。明治四十三年、四十歳の時、学習院にも職を得た。この時の年俸が千五百円である(前掲書、一二四頁)。学習院と東大を合わせてやっと千九百円である。

この手紙においても軍国主義を批判する進取の気性は健在である。米国にて間接的に聞き及んだ日本の軍国主義化の現実と直接触れることで彼は日本の現状に対して憂いを深くしたのである。彼は米国の大学に留学して政治学を学んだのでもない。市井の米国人との親密な交際の中で知らず知らず、アメリカン・デモクラシーの精神を身につけて行ったのである。大拙は一九六六年(昭和四十一年)の七月十二日に九十六歳でその生涯を閉じた。彼は晩年、蝶ネクタイをして方々に講演に出かけ

た。彼ほど蝶ネクタイの似合う禪者はいない。思うに、この蝶ネクタイは彼の心に学問したアメリカン・デモクラシーを象徴するものではないだろうか。

### 追記

鷗外書簡の「三宅秀民」が、「三宅秀氏の誤記である」と浅井卓夫『軍医鷗外森林太郎の生涯』（教育出版センター、一九八六年、三八頁）にあった。

わたくしは鷗外と対照的な三宅秀について一寸調べてみた。調べれば調べるほどにその対照性が立って面白かった。三宅秀の歴は、富士川游「三宅秀先生小伝」（中外医事新報一五五号、一九三八年）や「三宅秀先生を偲ぶ夕」（日本医事新報、八七四号、一九三九年）に審らかであった。

今特に対照的な面について少し贅言を加えたい。それは漢方に対する見方である。三宅は受容的、鷗外は敵対的であった。三宅は、「私は漢方の治療は数千年の長き経験があるのだから漢方を全く廃止してはいかないと云ふやうなことを明治十四年でしたか彼の一つ橋の大学の卒業式の時に演説したことがあります……。私はいまだに鍼でも按摩でも灸でも多少効はあるかと思つて居ます。……薬局方の編纂の時にも……素と日本国産の草根木皮を取入れて原稿を纏めたのは和蘭人ゲールツ氏であった。後年第三版、第四版となると……草根木皮は捨てられ主に化学薬品が多くなつて恰も独逸の薬局方を其儘移して来たかの

やうに私共には見えて居ります。」（資料「三宅秀回顧談」日本医史学雑誌、一三八一号、一九七〇年、七二、三頁）と述べている。即ち、数千年の歴史の風雪に耐えた漢方医学はそれなりに実効性があり、現にその実効性を西洋医学の徒のオランダ人ゲールツが認めて漢方薬の調査までしているのではないかと西洋医学の土俵にまで踏み込んで漢方医学を擁護しているのである。三宅秀の父三宅良斎（一八一七〜一八六六）は幕末の蘭医の最高峰に位置する人間である。当時としては最先端の西洋医学に通じていた。秀はその父のもとに育ち、自ら若くして米人医師へボンのもとで西洋医学を学んでいる。英語にも堪能で幕末に幕府の渡欧使節の一行に加わり西洋の事情には詳しい筈である。何故、漢方医学に肯定的なのか。

わたくしは同志社大学の図書館に大正十五年十二月二日に行なわれた「維新史料編纂会講話」の速記録があることを知った。講話の主は三宅秀である。コピーを依頼したけれども、貴重書であるから直接同志社に赴かなければ見られないと言われ、せん方なく出かけてみたところ、現物は全四十六頁の薄いものであった。文久三年の渡欧使節旅行の思い出話を語つたものである。ペラペラの旅行の回想録と知って些か拍子抜けしたが、面白い記述に出くわした。「此亜米利加へ遣された使節に対して、あちらから日本を益するやうなものを心付けて贈られたものがあります、其中に医書があります……。其医書と云ふものが、後年に至つて私が西洋医学所と云ふ所で借りて見ました所



が、医書は少しも役に立ちませぬ、なぜなれば、亜米利加で広く行はれて居ります『ホミオパティック』と云ふ流派の医書で、我々の方とは全く違つて居る外の本でありますから、実は三文の価値もありませぬ、それを私が読めないながら務めて読んで親父に質しますと、そんな馬鹿な治療方はない、そんな不法なことは無いと云ふやうな訳で、折角読んで話をする、そんな危険毒薬を法外に用ひると云ふことは出来ない話だと云ふやうなことを言つて誠められたことがございます」（八頁）とある。三宅は万延元年の幕府渡米使節への贈り物の中にあつた医学書を読んでみた。その医書とは、十八世紀末から十九世紀初めにロマン主義がみなぎつたドイツで現われたホメオパシーの医書であつた。

ホメオパシーとは最初ハーネマン（一七五五〜一八四三）によつて、「ある病気を治すにはその症状と似たものを健康な人におこすやうな薬を用いる必要がある」として唱えられたものである（小川鼎三『医学の歴史』中公新書、一九六四年、九四頁）。従来の西洋医学と正反対の処方をするわけで、父良齋が「そんな不法なことは無い」と言つたのも宜なる哉である。傑出した医学史家のズートホフの手になる『図説医学史』によれば、ホメオパシーは「杓子定規な荒療治で出血や中毒をもたらした多くの医師に比べて害が少なかった。……当時の他の方法と比べて多くの点で優れていた。」（小川鼎三他訳、朝倉書店、一九八二年、二七九頁）のであり、「科学性に対しては正当な

批判も起きたがそれは、当時の他の治療法にも該当するものであつた。」（同書、同頁）。すべての疾病を全身性のものとして捉えるハーネマンの医学体系は、「疾病原因を究めることなく、一に症候の観察と治療法とを主眼とした」（小川政修『西洋医学史』日新書院、一九四三年、七六六頁）ものであつて、漢方医療と一脈通ずるものがある。

しかし西洋医学を学び始めて間もない少年にとつてこのホメオパシーの医書との出会いは西洋医学が決して単線的な進歩を遂げているのではなく、複線的に展開している事実を衝撃をもつて知らせてくれた原体験ではないだろうか。わたくしは三宅秀の読書歴に詳しくないので確かなことは言えないけれども、少年の医学生に西洋医学の中に相反する流れが並存していることを教えてくれた医書との出会いは彼の医学観を奥行きあるものにしてくれたのではないか。それは進歩と退歩が前後に直列する線的医学観ではなく、プラスとマイナスが水平に並列する場の医学観でないかと思う。この医学観が、大正六年に「本邦古来先賢の士が研究し実行し来れる衛生書…を輯集して成つた『日本衛生文庫』に結実したのではあるまいか（『発刊の趣意』二頁）。

三宅の対極の鷗外は漢方医学に対して取つた態度はどうか。例えば、伊達一男『医師としての森鷗外』（續文堂出版、一九八一年）が「和漢方医論争」として項目を設けて詳述している（医師としての鷗外に着目した研究者には他に丸山博、宮本忍、

浅井基夫、磯貝英夫等がいるようだ。いずれの研究からも啓発されるところ大であったが、なかでも伊達の著作が白眉に擬せられるように思う。鷗外の父静男も松本順（一八三二～一九〇七）に学んだ蘭方医である。鷗外も幼少より父のもとで西洋医学に触れたわけだ。

初代の陸軍軍医総監も務めた松本順は軍陣医学の見地から漢方医学は戦場の負傷兵に対する処置において著しく西洋医学に劣るものとして、「漢医は断然西方医学に改むべしと命ぜらるべし」（『松本順自伝・長与専斎自伝』平凡社東洋文庫、一九八〇年、六六頁）と主張するほどに漢方医学の価値を全然認めなかった。実に漢方医と蘭方医の確執は嘉永二年の「蘭方医禁止令」と安政五年の「蘭方解禁令」に溯る（金杉英五郎『医制五十年史』内務省衛生局、一九二五年、四、五、一四頁）。少年の日の鷗外は父静男を介して松本の漢方観を自覚せぬまま受け継いで行ったのではあるまいか。

それかあらぬか、鷗外の漢方医学に対する態度は妥協の余地のない排斥の態度であった。鷗外にとって漢方医学は、「退棄すべき、否退棄したる草根木皮云々の医学」（『日本医学の未来を説く』全集二十八巻、一六九頁）であり、「和漢陳腐の医籍の現世の医学に比して、実際の価なく、僅に歴史的の意味あるを知る」（『所謂、和漢方医』全集二十九巻、四五八頁）ほど医学的には無価値のものであった。鷗外の治めた衛生学はどうかと言うと、「僅か二十年以来位な新しい学問です、……養生の

事のみを論ずるものではなくって、一言で云へば、人の健康を図る経済学のやうなものです」（『衛生学大意』全集三十巻、一五六頁）とあるように、それは西洋医学の最先端にある。しかも日本古来の養生論とは異なり、近代科学の方法を駆使したもので養生論の高一層に位置する。三宅が日本古来の養生論を衛生学の平面に置いて見たのとはまことに対照的である。鷗外から見れば鍼医はまさに「歴史的進歩を解せざる」（『鍼科』全集三十四巻、六四四頁）歴史的遺物である。漢方の全否定である。

一体この鷗外の思考様式はどこから来たものであるのか。「洋学の盛衰を論ず」という文章の中で鷗外は、「彼の学風は、自然を重んじ、偏に精神のみを説くに安んぜず。近世に及びて、所謂自然科学の勃興は、全欧州学問界の氣風を一変し、…蒸氣電氣の利用となり、……。此学風は支那の無き所にして、支那朝鮮は其の心を偏重し博物を卑む学を墨守せるを以ての故に、今の憐む可き所動の地位に立ち、我国は此西洋学を輸入したるを以ての故に、今の賀す可き能動の地位に立てるなり。」（全集三十四巻、二二四頁）と述べる。

この文章は明治三十五年に書かれている。当時の時代状況から見れば、「憐む可き所動の地位」とは被侵略国家を、「賀す可き能動の地位」とは侵略国家を指すものであろう。鷗外は西洋文化の受容で一日の長があった日本の朝鮮中国への侵略を「賀す可き」ことと捉えている。その侵略の武器が西洋文明であったのである。帝国主義的侵略能力の優勢をもって文明の価値を

評価するその図式はまさに福沢諭吉の明治十八年の「脱亜論」に重なる。ただ「脱亜論」が日本の朝鮮中国侵略の前に書かれた過剰防衛の神経症的文章であるに比し、鷗外の文章は日清戦争を経て日本が現実には朝鮮中国を侵略した後に書かれた文章であるだけに、侵略を肯定する無反省な文章は「脱亜論」より罪が重そうだ。これを、「日本の国力伸張への洋学者の一人としての森鷗外の健康な自負とみなしてよいだろう。」（『和魂洋方の系譜』河出書房、一九八七年）と見る平川祐弘の論述は首肯し難いものがある。中村文雄『森鷗外と明治国家』、三二書房、一九九二年）によれば、鷗外は日清戦争に従軍し、旅順大虐殺の惨劇の跡を実地に目撃しているのである（一一八頁）。

鷗外は自然科学の発展を単線的に進歩史観で捉えるが、その優劣のものさしは侵略能力の長短である。中国が日本を含め帝國主義列強の侵略を許したとて、その中国に西洋に伍すべき自然科学がなかったように論ずるのは暴論ではないか。中国の学問は決して「心を偏重し博物を卓む学」と規定出来はしない。既に科学史家のニーダムが証明しているように、中国の自然科学は膨大な実証の体系である。その体系の中に漢方医学は位置するのである。

鷗外の漢方医学の否定は実は鷗外が軍医であったことと深く関係する。近代日本の体制医学の暗部を一貫して摘出し続けた神谷昭典の『日本近代医学の定立』（医療図書出版社、一九八四年）によれば、漢方医学は伝染病の予防に無効で軍陣医学と

して役立たないのである（二五五頁）。軍陣医学は日本の帝國主義的侵略に奉仕するものである。遅れて帝國主義列強の仲間入りを果たした日本の医学には軍陣医学としては無用の漢方医学を包摂する余地などなかったたのであろう。神谷の言う「国家の医学」に漢方医学はなり得なかったたのである。果たして「日本における軍医制度確立の最大の功労者の一人」（北岡伸一『後藤新平』中公新書、一九八八年、一三頁）であり鷗外の上司でもあった石黒忠憲は明治二十五年に、「此劣等医（＝漢方医）ナルモノハ衛生法律軍事ノ用ニ供スルコト能ハサル」（括弧と傍点は筆者、「東洋医方再興に付意見」、日本科学史学会編『日本科学技術史大系』第二十四巻、一九六六年、三二二頁）と漢方医を完膚なきまでに貶めている。

鷗外は宮本忍『森鷗外の医学と文学』（勁草書房、一九八〇年）によれば、日露戦争宣戦布告直後に「防塞略説」と「露国人の防塞法」を著わしている（一一七頁）。これは鷗外が対露戦を意識してあらかじめ研究していたものであろう。宣戦布告直後の発表はその間の消息を物語るものである。鷗外は日本の陸軍首脳と一心同体で対露戦に備えていたのである。鷗外は日清、日露の戦後に現役の軍医として従軍し、着実に軍医として出世の道を歩んでいる。日清戦争では功四級の、日露戦争では功三級の金鵒勲章を授かっている（松井利彦『軍医森鷗外』桜楓社、二八九、二九二頁）。鷗外は明治日本の軍國主義的膨脹と呼吸を合わせて生きて来たのであろう。帝國主義的侵略を肯

定する側に立つ鷗外にとって漢方医学は無用の長物でしかなかったのである。

鷗外の歴史小説「伊沢蘭軒」にもしばしば登場し鷗外が序文を呈した名著『日本医学史』の著者でもある富士川游（一八六五～一九四〇）によれば、「経験的時代の西洋医学と東洋医学とは、共に単一の経験を拠として自然哲学上の思索に基づいて説を立てたものである。……ただ説明の言語の相違したる位に過ぎないものがある。」（『西洋医学と東洋医学』『富士川游著作集』第一巻、思文閣、一九八〇年、四一三頁）とあるように西洋医学と東洋医学は異なる自然哲学の基礎の上に築かれた壮麗な建造物であり、優劣のものさしを跳ね返す。更に、「支那医家も種々の点に於て、独創の見を有し、発明の説を立てたが、その果は我邦の医家の手にて結ばしめられたのである。」（同書四一二、三頁）とあるように、漢方医学の種は、日本の大地に芽吹き美事に大輪の花を咲かせたのである。世界に冠たる日本の漢方医学の精華は後進の帝国主義の蛮刀によって切り落とされたと言ふべきであろう。

漢方医学に対する態度を通して三宅と鷗外を比較して見たのだけれど、一見すると三宅に分が良いように見える。ただ漢方医学という観点を取り除いてみると、三宅と鷗外には意外にも親近性が認められる。三宅は明治十八年、医学教育調査の命を受けて欧州に派遣され、二十年に帰国すると、「医科大学改善案」を提出した。そこで三宅は医学教育に役立たせるため

に医学校が付属医療機関として「純然たる貧民施療院」をもつヨーロッパの例を提示した（『医制五十年史』二三五、六頁）。

国家の医療機関が無産者の病人を治療する見返りに研究材料並びに解剖材料として利用させよと言うのである。これは宮本忍によれば、「慈恵医療が国家主義思想と表裏一体になっていることを示唆するものである」（宮本忍『医学思想史 III』勁草書房、一九七五年、五五二頁）。これは飽くまで富国強兵政策の一環であった。軍籍に身を置かなかつた三宅とて明治の帝国主義日本の箍からはずれるようなことは出来なかつたのであろう。

鷗外は遅れて帝国主義の仲間入りを果たした日本の社会問題を風刺して多くの小説を書いている。その一つに大逆事件への鷗外の思いを仮託した「大塩平八郎」がある。最後の部分で鷗外は「平山は……人間らしく自殺を遂げた。」としめくくる。平八郎蜂起の密告者平山の自殺を「人間らしく」と表現する。自殺を「人間らしく」と表現する思想は鷗外の留学した西洋にはない。これは文化の根幹に関わる。西洋のキリスト教文化の中でイエスを密告した果てのユダの自殺は決して「人間らしい」とは見なされ得ない。人間は「神の像」(Imago Dei)（創世記一・二六）にかたどって造られた存在である。やむを得ず他人を殺すようなことがあつたとしても自分を殺すことは許されない。自殺を「人間らしい」責任の取り方とする思想は西洋とは無縁の、且つ西洋を知らない人間の抽象的思想である。「生きて虜囚の辱を受くるなかれ」という昭和の戦陣訓の思想とは至

近の距離にある。明治の軍国日本の膨脹は昭和のアジア太平洋戦争で破裂した。生きながらえる術はあったのに、「人間らしく」死なされて行った兵士の死をかつて天眞爛漫にも『うた日記』に「いざ散れ散らん けふのあらしに 息は絶ゆ 陛下万歳」と謳い上げた天皇制帝国主義イデオロギーの慎重居士鷗外は白玉楼中にてどのような気持ちで見つめていたのであろうか。

図らずも長々と駄文を連ねてしまった。不明の極みである。

三宅と鷗外は衛生学の観点においても対照的であるように思う。前者は社会政策的な志向、後者は法律的志向がいささか際立つ。三宅は早くも明治十三年に地方衛生の重要性を主張し、自ら視察員として各地区巡察し衛生行政の発展に貢献している（『医制五十年史』一一三、二四九頁）。晩年に著わされた『衛生長寿法』（富山房、一九二九年）からは劣悪な衛生環境の中で呻吟する貧しい人々への眼差しの暖かさが伝わってくる。一方、当時世界の最高水準にあったドイツ衛生学の碩学ベッテンコーヘル（一八一八〜一九〇一）の膝下に学んだ鷗外の大著『衛生新論』などは既存の調査資料を机上で冷徹にまとめ上げた観がする。黔首に対して法的整備をもって仁慈を垂れ天皇制国家体制の補強を図る官僚の忠良なる惻愼さが鷗外からは感じ取られる。しかし、この点において鷗外と対置されるべきは三宅よりも『国家衛生原理』の著者後藤新平であるかもしれない。最早、紙幅も尽きた。わたくしは安普請の明治天皇制国家の忠臣として、最後は結核に倒れた鷗外に哀憐の情を禁じ得ない。